

ご挨拶

平成25年1月から神道国際学会会長をおおせつかった栗本慎一郎でございます。学会創成期からの理事でありながら、これまで必ずしも表立って活動してこなかったことを、ここで改めて反省して学会の発展に全力を尽くしたいと思っております。

これまで学会は国際的かつ国内的に有意義なシンポジウムやセミナーを多数開催してきましたが、研究のテーマが日本古代史および天皇制論に関わるような場合、あえて論争のあるべき場所での論争が起らないように舵を取ってきたかもしれません。「国際」をうたう以上、論争をあえて呼ぶ少数意見には触れないのが正しいということも十分に上理解されますが、この分野で意見対立があることは日本の諸分野の諸学会のうちでもきわめて顕著でかつ一般の人にも日本では十分周知のことです。その意味で、国際的にもそうした論争がある状況を理解していただいてもいいのではないかと、そのほうが学問的にも公平ではないかと、日本以外の研究者のそれらについての意見や研究を持ち込んでもいいのではないかと愚考いたします。

したがって、学会の活動も、いわゆる神道学、宗教学から隣接の文化人類学、歴史学、政治学、哲学、社会学などの分野との交流を怖れず活発化させるべきだと思っております。私自身の専門が、歴史人類学および古代史、精神史に大きく比重をかけている経済宗教史に踏み込んで、最近著『全世界史』などでは強く比較宗教史に踏み込んでいくわけでもありますし、今年のテーマ「出雲と伊勢」などで学会としても表面をなでるだけの天皇論、神社論を展開するわけにも行かないと思えます。つまるところ、石橋がないのだから石橋を叩いては渡れない、のが神道研究なのではないでしょうか。もともと波風のある分野なのですから、波風を決して拒まずにかつ怖れずに頑張ろうと思っております。

栗本慎一郎

桜神宮で平成25年度社員総会開催

三月九日、桜神宮（東京都世田谷区）で、平成二十五年度の第一回理事會ならびに社員総会が開催され、栗本慎一郎新会長をはじめとする新体制が正式に承認されてスタートした。また、総会に引き続き、本会役員と一般会員の交流を深める懇親會が開催された。

社員総会に先立ち、桜神宮會館の會議室にて、三宅善信理事長が議長となつて平成二十五年度第一回理事會が開催された。會議では、栗本慎一郎会長および今回の会場提供者である芳村正徳理事（神習教教主）が挨拶を行ったのに続き、事務局業務統括の岩澤知子常任理事から、事務局移転の経過報告と新たに二名の事務局員を雇用することになった経緯が報告され、承認された。

また、今年度の目玉行事として十月二十六日に、東京で『出雲と伊勢・聖なる空間と古代王権』と題する公開セミナーを開催することが決定された。また、機関誌である『神道フォーラム』



の編集や学会の公式ウェブサイトへの管理について、それぞれの担当理事から進捗が報告された。他にも、七月にパリで開催される欧州における最大の日本紹介イベント『JAPAN EXPO』に参加すること等が承認され、理事會は終了した。

続いて、桜神宮神習館において、本会の平成二十五年度社員総会が開催された。新たに選出された役員（任期は二年間、再任可）の名前が紹介された後、栗本慎一郎新会長が開會の辞を述べ、ジョン・ブリン副会長を議長に選任して総会が開催された。

総会では、三宅理事長から平成二十四年度の事業報告・決算報告・監査報告が行われて承認された。また、平成二十六年度の事業計画・予算案が上程されて、原案どおり承認され、マイケル・バイ理事の閉會の辞をもって、社員総会は滞りなく終了した。

国際神道セミナー 「出雲と伊勢—古代王権と聖なる空間」

日時：平成25年10月26日（土）13:30～17:00

会場：政策研究大学院大学 想海楼ホール
（東京都港区六本木7-22-1）

主催：NPO法人 神道国際学会

【第1部】

基調講演「古代王権と出雲・伊勢」

講師／栗本慎一郎

コメンテーター／三宅善信

【第2部】

パネル・ディスカッション「出雲と伊勢—聖なる空間」

パネリスト／

マイケル・バイ「お伊勢参りと巡礼」

ジョン・ブリン「聖なる空間としての宇治山田」

ファビオ・ランベッリ「出雲神話における国際感覚の変容」

コーディネーター／岩澤知子

●入場無料ですが、事前申込みが必要です。

●講話はすべて日本語です。

■お問い合わせ・お申込みは

NPO法人 神道国際学会

Tel : 03-6805-7729 Fax : 03-6805-7769

info@shinto.org <http://www.shinto.org>

新役員ご紹介



吳善花 (オ・ソンファ)

評論家／拓殖大学国際学部教授。1956年、韓国・済州島生まれ。1983年、来日し、大東文化大学(英語学専攻)の留学生となる。その後、東京外国語大学大学院修士課程修了(北米地域研究)。主要著書は『攘夷の韓国 開国の日本』(文藝春秋、第5回山本七平賞受賞)、『スカート風の風(正・続・新)』(三交社・角川文庫)、『日本復興の鍵受け身力』(海竜社)、『私はいかにして日本信徒となったか』(ワック出版)、『見かけがすべての韓流』(ワック出版)、『なぜ世界の人々は日本の心に惹かれるのか』(PHP研究所)、『韓国併合への道 完全版』(文春新書)、『虚言と虚飾の国・韓国』(ワック出版) など多数。



茂手木潔子 (もてぎ・きよこ)

山梨県出身。専門は音楽学で日本の伝統音楽を研究。歌舞伎黒御簾楽器、文楽義太夫節、越後酒屋唄の研究を主とし、執筆活動に加えて展覧会や舞台公演の企画監修、VTRやCDの制作なども行う。東京芸術大学大学院修了後、国立劇場芸能部演出室職員、東京音楽大学非常勤講師などを経て現在、上越教育大学名誉教授、有明教育芸術短期大学教授、日本大学芸術学部非常勤講師。文化庁文化審議委員会、国立劇場における各種委員会、文科省教科用図書検定調査審議会、同大学設置・学校法人審議会専門委員会の委員を歴任。現在、企業メセナ協議会選考委員、アサヒビールメセナ芸術文化財団選考委員、日本文化芸術財団審査委員などの委員を勤める。2013年の活動として、単著『北斎とモース』(2013)、公演企画「東京芸能見本市～春迎え」(アーツカウンシル東京主催)、「北斎の音楽を聴く」(墨田区主催)、「越後の酒屋唄」(長岡文化振興財団主催) など。



芳村正徳 (よしむら・まさのり)

明治大学法学部卒、國學院大學文学部卒。神道神習教三世管長(初代教主)、桜神宮宮司第24期～第28期文化庁宗教法人審議会委員。教派神道連合会理事、同青年会議議長を経て現在同理事長。公益財団法人日本宗教連盟理事を経て現在同理事長(～平成25年6月)。神宮禰宜で大中臣65代後裔芳村正乗が明治初期に立教した伝統的神道の価値観を教義の柱とする教派神道の一派神習教の三世管長(初代教主)で桜神宮宮司。最近の表面的かつ過度な現世利益的信仰には懐疑的だが、これらを現代特有の信仰現象として関心を持ちつつ、現代人の心の救済と共に、自然と調和し日本人の心の奥底に流れ太古の昔から大切にしてきた神道の価値観を現代人の心の中に残してゆくことが使命であると考えている。



Fabio Rambelli (ファビオ・ランベッリ)

カリフォルニア大学・サンタバーバラ校、東アジア言語及びカルチャースタディーズ学科／宗教研究学科教授、International Shinto Foundation 神道研究寄付講座主任、東アジア言語及びカルチャースタディーズ学科長。専攻は日本宗教・思想史(特に真言密教、神仏習合思想)、宗教学、文化記号論。著書には『イタリア的思考方』(筑摩新書)、『イタリア的』(講談社選書メチエ)、*Buddhist Materiality*、*A Buddhist Theory of Semiotics*等。現在、前近代日本文化におけるインドのイメージーション、国際思想動向からみた神道史などを研究している。2012年11月に自然災害と宗教文化、2013年3月に東アジアの神々という国際シンポジウムを開催した。

神道国際学会役員(平成25年1月より)

役職	名前	所属団体及び役職
会長	栗本慎一郎	有明教育芸術短期大学学長／元衆議院議員
副会長	ジョン・グリーン	国際日本文化研究センター教授
理事長	三宅善信	金光教泉尾教会総長／(株)レルネット代表取締役
常任理事	岩澤知子	麗澤大学外国語学部准教授
常任理事	ムケンゲシャイ・マタタ	オリエンズ宗教研究所所長
理事	マーク・テーウェン	オスロ大学日本語学科教授
理事	マイケル・パイ	マールブルク大学名誉教授／元国際宗教学宗教史学会会長
理事	アレキサンダー・ベネット	関西大学国際部准教授
理事	吳善花	拓殖大学国際学部教授
理事	茂手木潔子	有明教育芸術短期大学芸術教養学科教授
理事	芳村正徳	神道神習教教主
理事	ファビオ・ランベッリ	カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授
監事	椎名潤	岐阜女子大学客員教授／元中外日報社取締役編集局長

パリのジャパン・エキスポで神道祭典

七月四日から七日にかけて、パリの国際見本市会場で欧州最大の「クール・ジャパン（格好良い日本）」の祭典『ジャパン・エキスポ2013』が欧州各地から二十数万人の観客を集めて開催され、本会の三宅善信理事長が開会セレモニーでスピーチを行った。

今年で第十四回目となる『ジャパン・エキスポ』は年々活況を呈し、アニメ・漫画・ゲームからアイドルに至るまで、現代の日本が世界に誇るコンテンツ産業の一大見本市であり、経済産業省や外務省もこのイベントを支援している。最近では、日本からも多くの人気若手アーティストや各地のゆるキャラが参加し、内外のメディアでも大きく取り上げられるイベントになっている。

そのような中、「世界一の水



開会セレモニーで祭詞を奏上する三宅善信理事長

高津宮の神職による修祓の後、出口王仁三郎師の玄孫にあたる出口春日師と土御門神道（陰陽道）の魚谷聡成師による降神と献饌の儀に続き、祭主を勤める三宅善信師が祭詞を奏上、玉串を奉奠した。続いて、巫女舞が奉納され、撒饌と昇神の儀を以て神事は終了した。引き続き、三宅善信師が『アニメと神道』と題するスピーチを英語で行い、来場者らに「日本のアニメを深く理解したければ、神道を学

準を誇る日本のアニメ文化の源泉として、神道を紹介して欲しい」との主催者からの要請もあり、本会の三宅善信理事長（金光教泉尾教会総長）をはじめ、数名の神職・巫女、そして、雅楽とJポップ音楽の両方を演奏できる「天地雅楽（てんちがらく）」のメンバーらが『ジャパン・モーメント（日本の瞬間）』というパビリオンの開会セレモニーを務めた。

連日数万人の来場者でごった返す各パビリオンの観客の中には、アニメキャラクターのコスプレをしているほど日本文化に憧れている人も多く、欧州の青少年が漫画やアニメを通じて日本語を熱心に習得していることは、家電製品や自動車産業等で国際競争力を失いつつある日本経済の将来の柱として期待されている。

三宅理事長らは、開会セレモニーだけでなく、エキスポ期間中、雅楽を演奏しながら会場内を練り歩き、毎日何回か会場を替えては、神事やスピーチをはじめ、雅楽と現代音楽のセッションを行った。本会が支援している今回の「神道プレゼンテーション」は、大きな盛り上がりを見せ、欧州のマスコミでも報道された。



玄関ホールで神道について観客にスピーチする三宅理事長

ぶことを勧める」と説いた。

三宅理事長らは、開会セレモニーだけでなく、エキスポ期間中、雅楽を演奏しながら会場内を練り歩き、毎日何回か会場を替えては、神事やスピーチをはじめ、雅楽と現代音楽のセッションを行った。本会が支援している今回の「神道プレゼンテーション」は、大きな盛り上がりを見せ、欧州のマスコミでも報道された。

神社巡り① — ジョン・ブリン

三ノ宮神社

●京都市西京区椋原杉原町12-1

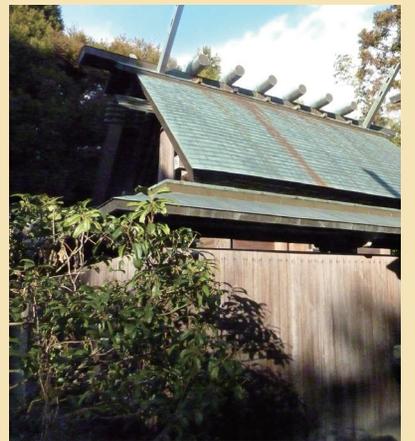
『神道フォーラム』で新しい企画を始めました。「読者の皆さんに是非この神社も紹介したい」、理事が執筆するコーナーです。

三ノ宮神社の創立状況は不明だが、はやくも10世紀にこの地域に小さな祠があったらしい。酒呑童子しゅてんどうじが主役の伝説に出る祠。近くの大枝山を拠点とした鬼の酒呑童子は、入浴する旅人を襲ったりしていた。そこで立ち上がったのは武将源頼光。頼光は、祠に備えてあった神酒を酒呑童子に飲ませ、酔いつぶれるのを待って追い払うことに成功。祠が三ノ宮神社に拡大し、そこに武勇の大神スサノオ素戔嗚、酒の大神サカトケ酒解、そして山の大神オオヤマノ大山咋がそれぞれ御祭神として勧請されたのは、そのためだという。三ノ宮神社の歴史が確認できるのは、江戸時代から。5代將軍徳川綱吉は神社の神徳を仰ぎ、葵の家紋を許した。幕末となれば孝明天皇は攘夷祈願を命じ、社の造営金を下賜し、菊華紋の使用も許した。現在の舞殿の屋根などに見える葵・菊華両の家紋瓦がその歴史を語る。

今年、この三ノ宮神社が目目されてよいのは、伊勢との関係のため。ガラスばりの拝殿の後ろ



三ノ宮神社拝殿（写真筆者）



三ノ宮神社本殿（写真筆者）

に見え隠れする本殿は、伊勢神宮のいわゆる「古材」で出来ている。1973年の式年遷宮の際、内宮境内別宮である風日祈宮かざひのみが分解されたのを三ノ宮神社がもらった。（無料でもらったわけではもちろんないが。）分解した古材をトラックに載せ、伊勢から当地に運んできた。そして伊勢の宮大工が三ノ宮神社の本殿として立て直した。敷地内に敷き詰められた白石も、伊勢のもの。伊勢に立っていた風日祈宮と唯一異なるのは、屋根。茅葺きだったのがここでは長持ちする銅板になっている。

こうした事情の裏には、人脈があった。当時の三ノ宮神社木村勝茂宮司は、伊勢神宮の大宮司徳川宗敬と親しく、さらに実業家で、伊勢神宮総代トップの松下幸之助のサポートも得た。

筆者にこう語ったのは、現役の三ノ宮宮司木村幸比古先生。木村宮司は、豊剣会会長の武道家（八段）で、幕末維新期についてなんと百冊もの本を書いている。さらに、京都の羽衣国際大学で明治維新などを教える傍ら、京都の霊山歴史館の学芸課長を務める、実に多才な方である。（なお、木村宮司は、国学院大学在籍中、神道国際学会前会長の園田稔にも教わったと言う。）式年遷宮の年に伊勢に思いを馳せる木村宮司：「振り返る原点が日本のどこかにないため」だと。その原点は伊勢神宮に他ならない。人々が伊勢にお参りをして「あっ！」と、言葉にならない感情を感じさせるものが。伊勢神宮もそうである様に、三ノ宮神社もそうあってほしい、と言う。

日文研主催の国際シンポ「転換期の伊勢」 ブリーニング副会長ら本会役員も研究発表

国際日本文化研究センター（小松和彦所長、京都市）が主催する国際シンポジウム「転換期の伊勢」が七月二十六、二十七両日、同センターで開かれた。学際的に諸分野の学者が発表と討議を展開した。海外からは米・中・ノルウェーの六学者が発表を行った。

今シンポは、式年遷宮が大詰めを迎えた伊勢神宮の歴史を新たな観点から見直そうというものの。シンポ運営の中核を担った同センター教授で、本会副会長でもあるジョン・ブリーニング氏は冒頭、「聖地・伊勢に対して学際的、国際的なアプローチを行うところが注目される」と挨拶した。

「転換期」に着眼するため、古代―中世（セッシヨン1）、中世―近世（同2）、近世（同3）、近代―現代（同4）で区分し、各セッシヨンとも四学者の発表と二学者のコメントがあり、さらにオプザーバーとして加わった学者らを含めた質疑応答も設けられた。

セッシヨン1で三重大学名誉教授の山中章氏は「考古学からみた伊勢神宮の起源」と題して話し、伊勢の古墳から出土する

船形埴輪などの分析から、東国とのつながりも考慮すべきだとした。また、時代が下ると、国家寺院への領地の施入など、大和王権が伊勢に関心を寄せて進出する史実を物語る出土史料が増えてくるとし、「五・七世紀には直接的に王権が伊勢に関わる。それを背景に神宮も成立した。そして壬申の乱での天武の勝利を機に、ついに皇祖神化したのではないか」と述べた。

同じくセッシヨン1でカリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授のヘルマン・オームス氏は「伊勢に見え隠れする仏教」を主題に、古代・中世を含めて通時的に伊勢にも神仏の関係性があったことを示した。同氏は「少なくとも近代以前の日本では、純粋単一なイデオロギーを固持しようというこだわりは、我々が想像するほど強くはなかった」と話し、さらに、「イデオロギーが崩壊しても祭祀は残る。伝統というものは、政治機構が変化したとしても生き残っていくものだ」として、権威の性格と在りようから神宮を考察した。

セッシヨン1ではこのほか、本会理事でもあるオスロロ大学教授のマーク・テーウエン氏が

「神人、混沌の始めを守る」―鎌倉時代の混沌論の意義について―と題して発表。朝廷に独占されていた古代の伊勢神宮が、王朝時代になると多少の自立性を持ったとし、この転換点を経て中世において「アクター」となった人々の言説、とくに「混沌論」としての度会行忠の説の解釈を行った。

セッシヨン2では、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授のウイリアム・ボディフォード氏が「中世伊勢と仏教」と題して発表し、応仁の乱の前後という激動期に勘合貿易で神宮の資金調達に活躍した法楽舎や、式年遷宮の執行のために尽力した慶光院清順尼ら仏教尼の存在を取り上げた。

同セッシヨンでは本会理事でもあるカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授のファビオ・ランベッリ氏も発表を行い、「浮遊する記号としての『伊勢』―日本史における伊勢信仰の多重性と神道の絶えざる再コード化」をテーマに、文化記号論という表現（シニフィアン）を重視あるいは強制する伊勢の傾向を解釈した。

セッシヨン3で佛教大学教授の斎藤英喜氏は「読み替えられ

た伊勢神宮―出口延佳、本居宣長を中心に」を主題に論考を進め、近世における伊勢神道に関する言説について、出口延佳は万民向けの世俗倫理化した神道への読み替えを、また本居宣長は普遍的志向によって世界観の読み替えをし、中世の伊勢神道を近代へとつなげたとした。

セッシヨン4ではブリーニング氏が「戦後の伊勢を語る―『神域』、『俗域』、そして『言説』」と題して発表。第二次大戦後の伊勢を「神域」と「俗域」のダイナミックな複合体として捉え、両域をめぐめるマスコミの論調や、鉄道会社の宣伝物の文句などに、式年遷宮をめぐる「語り」のシフトを読み取った。

以上各氏のほか、国立歴史民俗博物館准教授・小倉慈司、茨城大学准教授・伊藤聡、コロンビア大学准教授・マックス・モーマン、関西学院大学教授・西山克、北京大学准教授・劉琳琳、佛光大学教授・田山令史、皇學館大学教授・河野訓、皇學館大学教授・田浦雅徳、京都大学教授・高木博志の各氏も発表した。またコメントを担当したのは、

神宮式年遷宮「お白石持行事」に参加 八月二日、本会から約百人

式年遷宮のすすむ伊勢神宮では、新正殿への「遷御」を二ヵ月後にひかえ、七月二十六日から九月一日までの約一ヵ月間の日程で、「お白石持行事（御白

石奉献）」が連日、行われている。伊勢の旧神領民をはじめ全国各地の特別崇敬者が、新宮の建つ御敷地に白石を敷き詰めていく行事。

神道国際学会は八月二日、神領地の一つである小川町の「お白石持行事」（内宮）に参加。奉献した。参加者は同町「勢勇団」と一緒に、御白石を積んだ奉曳車の綱を手に、木遣歌とともに約一キロの「おはらい町」を宇治橋まで奉曳。その後、橋を渡って御白石を奉受し、一人ひとり内宮の新・御敷地に「お白石」を、心を込めて奉納



小川町勢勇団を奉曳する「お白石」も加わって本会も

した。なお、奉献に先立つ前日には、神宮を臨む二見浦に鎮座する二見興玉神社で浜参宮を行い、無垢塩による祓いを受けた。今回の「お白石持行事」には、本会からは約百二十人が参加した。前事務局長の梅田節子氏が音頭をとって広く一般に呼びかけ、実現した。会の役員からはジョン・ブリーニング副会長、岩澤知子理事が行事に加わった。また、日本文化に関心のあるロシア人からも参加申し込みが多数あり、当日は奉献団と一緒に体験していた。

天地の運氣を取り込んで

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表
三宅善信

アベノミクスや黒田日銀総裁による異次元緩和で、円安・株高と久しぶりに日本の経済が活気づいてきた。バブルが弾けて二十余年…。世界では、その間「9・11」事件、リーマンショック、欧州金融危機をはじめいろんな出来事が起こり、その都度、国際金融市場は暴落したが、ほどなくすると元通りに回復して、日本の「失われた二十年」のように、ずっと低迷し続けていた国は珍しいと言える。

ならば、何故、日本だけがかくも長期間にわたって不景気をかこってきたのか？日本人が怠けて働かなかったせいなのか？答えはノーである。ギリシャ人の何倍も働いてきた。日本社会の規制が多いせいなのか？答えはノーである。この間、驚異的な経済発展を遂げてきた共産主義政権下の中国のほうが遙かに社会的規制が多い。日本社会の少子高齢化が進んだせいなのか？答えはノーである。日本より先に少子高齢化社会になった北欧諸国の経済も好調である。実は、1980年代に「ナンバーワン」と羨まれた日本が、かくも長期間にわたって経済不況のトンネルから抜け出せなかったのかという理由について、万人が納得のできるような明快な診断を下せる経済学者は誰もいない。この間、日本はいわば生活習慣病のような状態であった。

ところが、昨年末の安倍政権の発足以来、長年続

いてきたデフレ不況にも脱出の気配が感じられるようになってきた。しかし、アベノミクスの「三本の矢」として提唱されている「大胆な金融緩和」や「機動的な財政政策」や「民間投資を喚起する成長戦略」という政策は、どれも目新しいものではなく、この二十年間、名称はどう名付けられたかは別として、ほとんどの政権で同様の政策が打たれてきた。だから、この間の日本政府の累積債務は、1993年の379兆円から1178兆円（今年度推定値）へと増える一方（財政出動しっ放し）だったのである。だが、これだけ巨額の財政出動をしてきたにもかかわらず、デフレスパイラルが続いてきた。日経平均株価もバブル経済絶頂期の最高値の5分の1から3分の1の間の低価格帯を二十年間、行ったり来たりしてきた。

いくら三年三カ月間の民主党政権が酷かったからとはいえ、政権に復帰した自民党安倍氏の総理登板も二度目のことであり、決して目新しいものではなかった。にも関わらず、この半年間に日本の経済環境や政治的社会状況は劇的に変化した。いったい何が日本をこれだけ劇的に変えたのか？それは、二十年間にわたって続いてきた出口の見えない鬱病のような閉塞感と、日本人がお人好しなことにつけ込んで火事場泥棒のような振る舞いをして平然としている厚顔無恥な周辺諸国の態度に対する生理的嫌

悪感と、格差拡大をはじめとする困難な社会問題に対して見て見ぬふりを決め込んできた一億総引きこもりの状態に、覚醒の冷水を浴びせかけたのが東日本大震災と原発事故であった。

今、民族存亡の危機に瀕して、極めて多くの日本国民が前向きな気持ちになってきている。また経済的にも、まだまだ国民ひとり一人の実際の所得が増えたわけではないのに、この前向きな気持ちが現在の日本の好況感を創り出している。まさに「景気は気から」である。景気に限らず、天気・人気・病気と「気」の付く言葉は皆、自分一人の頑張りだけではどうすることもできないものであり、まさに「雰囲気」が支配するものである。漢代の辞書『説文解字』によると、「氣(Qi)」とは、雲気の意がある「气」と、米を炊飯する際に生じる蒸気の形象を合わせたものであり、動物の氣息の意でもあった。

この「気」という概念は、ギリシャ語の「プシュケー(魂)」やラテン語の「スピリトゥス(精神)」やサンスクリット語の「プラーナ(生命力)」と同様に、われわれの「氣息(呼吸)」と極めて密接に関連しているところから見ても、洋の東西を問わず、古来より人間は、目には見えない「気」の働きに注目して、そこに神的働きを感知してきたことは明らかである。神道では、「この世は、神と人との共同作業によって維持生成されている」と考える。動物は、生存の危機に瀕したとき思わぬ生命力を発揮することがあるように、われわれ日本人も、天地自然の運氣を自分たちの体内へ取り込んで、直面するさまざまな困難から逃げることなく立ち向かってゆかねばならない時期にあると思う。

理事の業績・研究報告

ジョン・ブリン理事

・近代化の中で変貌する伊勢神宮と出雲大社、「歴史読本」6、2013
・知られざる業績：近代日本の外交史に果たした明治天皇の役割、「特集 明治天皇100年目の実像 歴史読本」12、2012
・Fine words indeed: Yasukuni and the narrative fetishism of war, in Prohl and Nelson eds., *Handbook of contemporary Japanese religions*, Brill, 2012
・「吉大社の神々」滋賀山王会 会報誌：山王信仰」1、2012
・Shinto, in Anheier ed., *Encyclopedia of Global Studies*, vol. 4, Sage, 2012

・近代外交体制の創出と天皇「荒野泰典他編『日本の対外関係7：近代化する日本』吉川弘文館、2012

岩澤知子理事

2012年4月に米国・シアトルで開催されたアメリカ哲学学会大会において、拙著 *Tama in Japanese Myth: A Hermeneutical Study of Ancient Japanese Divinity* (『日本神話におけるタマ：古代日本の神観念を探る』)を題材にしたパネル・ディスカッションを行いました。このディスカッションでは、著者以外に、米国の大学に所属する4名の学者(本学会理事のフアビオ・ランベッリ教授も、そのうちの一人)を招き、さまざまな角度から日本の宗教的意識のあり方について議論しました。その成果が、北アメリカ・カール・ヤスパース学会の電子ジャーナル *Existenz* Vol. 7, No. 2 (<http://www.bu.edu/paideia/existenz/contents-current.html>)、2013年4月発行)に掲載されています。ぜひご覧ください。

ムケンゲシャイ・マタタ理事

2012年9月17日に福岡にて日本カトリック司教協議会・諸宗教部門主催のシンポジウム「預けられたいのちを大切に」に「宗教者の使命「自死をめぐって」」の企画に携わりました。この会では、14年連続して3万人を超える自死者が出る日本の現状を鑑み、キリスト教、神道、仏教などからの宗教研究者が、それぞれの属する教団や地域社会における自死に関する知識と問題意識について発表を行いました。同年11月17日に真生会館学習センターにて開催された「日本の教会を考えるシリーズ―神学の宴の集い」では「宗教的空間における地域神社・教会の役割」というテーマで講演を行いました。また同じく11月19日に行われたWCRP日本委員会平和研究所第5回研究会では、「第二バチカン公会議後の教会変遷と諸宗教間対話の精神」というテーマで講演を行いました。

マーク・テューエン理事

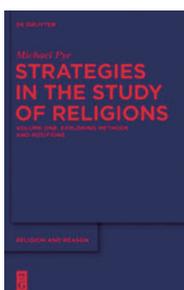
最近の研究テーマは、3つあります。
①伊勢神宮史。時代ごとに変わった伊勢神宮の社会的地位、神宮経営に関わる人々の入れ替わりを注目しながら、神宮の度々の変身を1冊にまとめて英語圏で紹介する本を、John Breen (日文献)と協力しながら準備しています。言うまでもなく、今年の式年遷宮が大きな研究対象になります。
②アジアの中の神仏習合。チベットのボン教の専門家、Henk Blezer (ライデン大学)との共同研究の結果として、「仏教圏の中のTathavism」という論文集が夏に刊行される予定です。
③江戸時代後期に、武陽隠士という匿名を使った侍が「世事見聞録」という社会評論書を書きました。武陽の議論の中で、宗教批判が大事な地位を占めています。「世事見聞録」の英語訳(共著)と武陽の宗教観についての論文が今年中に刊行される予定です。

マイケル・パイ理事

2013年3月、*Strategies in the*

Study of Religions (2巻、786ページ)を出版しました。特に宗教理論に関わりをもっている論文を上述の本に所収：「Modern Japan and the Science of Religions」(第1巻)、「Shinto and the Typology of Religions」(第2巻)を収めた「Buddhism and Shinto on one Island」は、琵琶湖上に存する竹生島において、寺院と神社間における弁才天の混在に関するもの。有機性のあるこの2巻は、神道、さらに神道神社への重要な論及をしています。詳細は、こちらのサイトをご覧ください。

<http://www.degruyter.com/view/product/184080>
<http://www.degruyter.com/view/product/184339>



三宅善信理事・芳村正徳理事

MDGs達成千日前の
公開書簡を英国紙
フィナンシャル・タイムズに

「ミレニアム開発目標(MDGs)」の達成期限千日前に当たる4月5日、本学会の三宅善信理事(金光教泉尾教会総長)と芳村正徳理事(神習教教主)が、英国国教会の首座カンタベリー大主教ら世界を代表する60人の宗教指導者たちと連名で、英国の経済誌「フィナンシャル・タイムズ」に公開書簡を発表しました。「MDGs」とは、2000年9月に、世界百数十カ国の首脳が国連本部で一堂に会し、「極度の貧困と飢餓の撲滅」「普遍的初等教育の達成」「環境の持続可能性の確保」など8つの分野において、2015年末までに数値目標を達成することを誓ったが、実際にはその半分も達成されておらず、達成期限まであと千日と迫った時点で、世界の宗教指導者がG8各国政府首脳へその早期実現を迫っています。

話題のこの人

日文研の外国客員研究員の任務を終えこのほど帰独した

アンナ・アンドレーワ博士（ドイツ・ハイデルベルク大学）

**三輪流神道など中世神道説と密教の関係性を考究
今後は密教思想の「儀礼」「身体知」も研究対象に**



中世日本における宗教思想の

様相を精力的に活写する中堅研究者として注目されている。国際日本文化研究センター（京都市）の外国客員研究員として来日。このほど八ヶ月間の滞在を無事に終えて、奉職中のドイツ・ハイデルベルクへと帰国した。

中世という時空に目を凝らし、密教と中世神道の関係性や、神仏習合的な教説と思想、さらに習合における密教思想の適応について、その実態を考究してきた。とくに中世における三輪流神道の解明に実績がある。

三輪、伊勢、室生、比叡……。各地に点在する聖地に澎湃した神道説を眺めるとき、その多くに密教の事相と教相が色濃く反映している。三輪流の解析で得た知識をもとに、今後は、そうした伊勢神道、山王神道などと密教の関連にも研究の手を伸ばしていきたいという。また、そこに垣間見ることのできる「身体」と「身体」の密接なつながりという興味深い課題にも取り

組みたいとしている。

「その場合、仏教医学からの影響も考慮に入れる必要があるでしょう。中世密教思想と儀礼における身体・五臓に関する思想、あるいは、お産や女性の身体と健康に関する思想・儀礼・文化的歴史にも研究対象を拡げたい」と話す。

ロシア・シベリアの出身。ロシアと日本の歴史的な交流が、じつは非常に濃密にあったという事実を子供の頃に知り、日本の文化と歴史に興味を覚えたという。十四歳で日本語を習い始め、イルクーツク言語大学に入學してからは日本語と日本文学を本格的に勉強した。

やがて文部科学省の留学生として金沢大学大学院に入り、修士論文では西行を取り上げた。その和歌を分析する過程で、そこに内在する遊行聖や僧侶の精神や宗教性にも触れることになり、和歌研究にも思想・宗教的な視点が不可欠だと気づいたという。

イギリス・ケンブリッジ大学

に移ってからは、神信仰、前近代の神仏習合、聖地の歴史、遊行の活動などにも学究的な観点を置くようになり、修士課程では「新古今集における和歌」と神祇歌について「をテーマとした。その流れが、博士課程における「三輪流神道」の研究へとつながっていく。

その間、アメリカ・ハーバード大学のライシャワー研究所にポストドクトラル・フェローとして滞在したこともあり、神仏習合関係の史料を調査しながら博士論文の練り込みを進めた。現在でも、同研究所およびケンブリッジ大学の外国客員研究員としての肩書きを持ち続けている。

「日本宗教史において、やはり中世というのは面白い時代だと思う。神仏習合と言われるように、多様性と変貌があり、研究テーマも尽きません。グローバルな観点からいっても、中世・前近代史の宗教概念にとって大事な事実を提供してくれます」

このたびの八ヶ月にわたる滞

日では、日本文化研究センターの図書資料だけでなく、京都大学や高野山大学の図書館、叡山文庫、伊勢神宮文庫、金沢文庫、そして国立公文書館などに足を運び、多くの史資料の調査に時間を割いた。既知の学者や若手研究者との情報交換、討議も積極的にこなした。そして、多忙な日々の合間をぬって、行く先々、日本各地の四季折々の風景も楽しんだようだ。

普段から、研究以外では映画館や美術館、劇場に通い、写真や陶磁器にも関心を寄せるなど多趣味。「日本のものでは、木版掛け軸や九谷焼に、とくに興味を持っていきます。滞日中は、各地の神社やお寺の季節の変化を楽しみながら、日本の中世に思いを馳せていたものです」。そして「自家製料理を作り、家族と一緒に散歩や旅行に出かけるのも、やはり気持ちの転換になります」と語ってくれた。

神道国際学会事務所清祓式並びに神棚奉鎮祭

平成25年1月31日（木）、東京都世田谷区玉川台二丁目に移転した本部新事務所において事務所清祓式並びに神棚奉鎮祭が行われ、同年1月より新会長として就任した栗本慎一郎



会長、ジョン・グリーン副会長、三宅善信理事長、ムゲンシャイ・マタタ常任理事・岩澤知子常任理事参列の下、本会の芳村正徳理事により御祭儀が厳粛に執行されました。

新事務所への移転に伴って新たに設けられた清々しき神棚には神宮大麻が納められ、祭典では新事務所はもとより参列者一同が大麻で祓い清められました。また齋主により、本会が神々の大御恵を賜り諸々の災い無く弥益々の繁栄と発展を祈念する祝詞が奏上されるとともに、参列者全員が一人ひとり祈りを込めた玉串を御神前に捧げて拝礼し祭典は滞りなく執り収められました。

本会が日本に根ざす神道と世界の諸宗教と

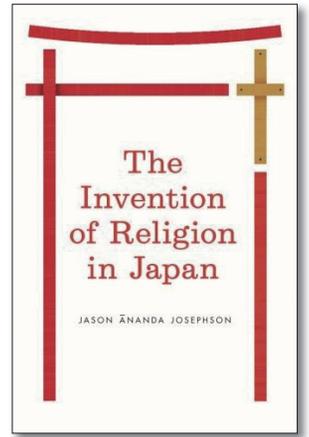
の交流と提携を希求し、神道の国際的な研究・啓発の機関としての活動を展開してゆく上においても、本部事務所において神々に謙虚な気持ちで接する心を持って神祭りを行うことには大きな意義があります。

新事務所は東名高速東京インターや東急田園都市線用賀駅にほど近い交通至便の地であり、国際的に広く情報を発信し交流を深めてゆく本会にとって、象徴的にもふさわしい場所といえます。祭典後には早速新事務所においての第一回目の会合が開催され、神々の御守護をいただく新たな事務所での第一歩を記しました。

The Invention of Religion in Japan

Jason Ānanda Josephson

University of Chicago Press 2012, 387 pages, ISBN: 10:0226412342.



The question of what counts as “religion” in Japan has exercised the minds of Japanese and foreign thinkers alike since the encounter with the western world became a matter of existential importance in the nineteenth century. As is well known, the term *shūkyō* came to be the usual translation for the English “religion” and related words in other western languages. The precise origins of the word *shūkyō* remain obscure. In this book the author undertakes a highly sophisticated search through many of the positions which influenced the development, or as he says, the “invention” of the term religion during the nineteenth century.

If I understand the author’s general argument correctly, he is talking about the invention of the concept of religion to refer to a wide variety of matters which, at least in part, pre-existed the use of this particular concept to refer to them. For example, Shin Buddhism or Shinshū, which on any view has to be regarded as an example of a religion, certainly existed before the Meiji Restoration, even though it was not referred to as a *shūkyō*. In one or more senses, “Shintō” too has a pre-Meiji history. The title of the book is therefore misleading in so far as it does not use quotation marks. It should really be “The Invention of ‘Religion’ in Japan” and although this may seem complicated, that is what this complex book is in fact about.

The main motive for the reorganization and mobilization of terms such as *kyō/oshie*, *dō/michi*, *shinkō*, *meishin* and *shūkyō* was to meet the wider pressures of the time. There were above all two. The first was the pressure from the external imperialist powers of the day. These foreign powers wanted international rules relating to various aspects of life, of which “religion” was seen as one. The second was the urgently perceived need for a national ideology in Japan which would help to secure the state in the context of international pressure. So the decision was taken to highlight, above all, the Emperor system, together with those Shintō myths and shrines which related to it and could be interpreted as being of national significance. This process excluded or downplayed miscellaneous local narratives and sacred spots, it excluded purely personal “religion” for which an optional or free area could be made available, and it excluded a wide range of popular concepts and practices which were set aside as “superstition” (*meishin*). The resultant form of Shintō, termed “the Shinto secular” by Josephson, was then presented as being neither “religion” nor optional.

Clearly the typology of Shintō is important, having implications which are not merely analytical but also political, today as yesterday. It is interesting therefore that with “the Shintō secular” Josephson introduces a concept which was not part of any sets previously advanced by politicians or apologists, not to mention independent analysts. The expression may seem grammatically confusing, for he uses the noun “Shintō” as an adjective and the adjective “secular” as a noun. Similarly, it seems unnecessarily stilted to translate *kokugaku* as “national science.” Of course, “nativism” is a very bad translation for *kokugaku*, and so Josephson argues for “national science” in a substantial and learned footnote (p. 295). Yet this remains unconvincing. After all, “(national) science” is problematic for all kinds of reasons, as expounded by the author himself, while “national learning” is rather harmless and has established itself quite satisfactorily. In view of the emphasis on “the Shintō secular”, it is surprising that the relatively well established concept of “civil religion” does not get any attention at all.

The overall story of the concept “religion” is in fact well known, but Josephson tells it with numerous interesting references. His exploration is marked by a strongly post-modernist intellectual style, which relentlessly probes the artificiality of every constructed concept. In the end, everything seems to have been “invented”: religion (of course), superstition, the secular. Such intellectualism is enjoyable. Yet one also begins to wonder whether, during the decades when all this invention was taking place, ordinary people ever went to visit shrines and temples or carried out ritual activities of any kind, as they had done in the Edo Period and still do in their millions. While Josephson claims to be steering between those who regard religion as “a universal” and others who regard “religion” as “a purely European hegemonic imposition” (p. 256), he also went so far as to write on the same page “...there were no Japanese religions before the mid-nineteenth century...” (p. 256). Yet

it still seems necessary to consider the history of these non-existent religions from time to time! For example, when and how was *Konkōkyō* founded? In general, despite all careful and even sceptical reflection over terminology, it should still remain possible to consider fields such as politics, class structure, commerce, religion, education, visual culture, and so on, in the Edo Period, and also before.

The bottom line in this work seems to be that it is above all the term “religion” which should be abandoned with respect to pre-Meiji times. If “religion” is presumed to be simply Christian, western and modern, there could not have been any “religion” in Japan until it was invented –so the argument runs. However, the term “religion” is nowadays used by specialists in various, often much more subtle ways, and the history of religions is widely recognized to be a quite massive subject, including whatever is relevant to its scientific purview in any cultures whatever. As far as Japan is concerned, it was above all the nineteenth century ideologues who were responsible for gross oversimplifications. In popular intellectualism and in the train of the *Nihonjinron*, such oversimplifications have been peddled with ever more persistence. Do we have to share in these oversimplifications? On the one hand, yes: the various concepts in use have been invented and constructed, again and again, and indeed they have a complex history, both modern and pre-modern. But on the other hand, no; the recognition of the relative development of language (already noted by Tominaga Nakamoto in the eighteenth century) does not mean that all attempts to correlate Japanese and western terminology have to be abandoned.

These are but a few comments in reaction to this learned, exciting, and sometimes over-excited book. In a short review it is not possible to do justice to it. Used with caution, it will certainly be a great aid for all who are interested in working through the various ideological entanglements which are explored.

Michael Pye

University of Marburg, Germany July 2013

■要約

『日本における宗教の発明』

ジェイソン・アーナンダ・ジョセフソン [著]

(シカゴ大学出版局、2012年、387ページ)

評／マイケル・パイ (独・マールブルク大学名誉教授)

日本において「宗教」とは何であるかという問いは、19世紀の欧米への門戸開放が日本人の実存を揺るがすようになって以来、日本人のみならず外国の思想家にとっても重要な課題であった。本書は、この19世紀・日本の状況を丹念に辿りながら、日本において「宗教（という概念）」が、いかに「発明」されることになったかを論証していく。本書は徹底したポストモダンの方法論に則っており、いかなる概念も結局は人工的に構築されたものに過ぎないという態度を貫いている—日本における「宗教」という概念も、その例外ではない、と。そもそも「宗教 (religion)」という概念は、キリスト教的、西欧的、近代的な文脈でのみ語りうるものであり、従って19世紀にその概念が「発明」される以前の日本には「宗教」と呼べるものは存在しなかった—本書はこう主張するのである。しかし、ここで評者は問うが、「19世紀における宗教の発明」以前の江戸時代、もしくはもっと前の時代から、日本の民衆によって綿々と引き継がれてきた宗教的行為は存在したのであり、この行為をもし「宗教」と呼ばないとしたら、我々はいったいそれをどう定義すればよいのか。「宗教」をめぐる日本と西洋の概念のあり方を探究していくことは今後も重要な課題であり、本書はその探究の良き助けとなるであろうことは間違いない。

新刊 紹介

『伊勢神宮 常若の聖地』
千種清美、1470円、ウェッジ、2012年11月

『伊勢神宮めぐり歩き』

矢野憲一(文)・中野晴生(写真)、1575円、ポプラ社、2012年10月

『鉄道が変えた社寺参詣』

平山昇、840円、交通新聞社、2012年10月

『すぐわかる日本の神像』

三橋健、1890円、東京美術、2012年9月

『神社は警告する 古代から伝わる津波のメッセージ』

高世仁・吉田和史・熊谷航、1470円、講談社、2012年11月

『女性宮家創設』ここが問題の本質だ！』

櫻井よしこ・竹田恒泰・百地章、630円、明成社、2012年12月

『銀鏡神楽 日向山地の生活記』

濱砂武昭、4200円、弘文堂、2012年7月

『古事記はいかに読まれてきたか(神話)の変貌』

斉藤英喜、2520円、吉川弘文館、2012年10月

『吉田神道の四百年 神と葵の近代史』

井上智勝、1575円、講談社選書メチエ、2013年1月

『好古研究資料集成 宣長・鈴屋関係資料集』

中澤伸弘・宮崎和廣、16800円、クレス出版、2012年4月

『宗教と現代がわかる本 2013』

渡邊直樹責任編集、1680円、平凡社、2013年3月

『日本の神話と神様手帖』

秦まゆな、1365円、マイナビ、2012年12月

『神社の本殿』

三浦正幸、1890円、吉川弘文館、2013年1月

『事典 神社の歴史と祭り』

岡田莊司・笹生衛、3990円、吉川弘文館、2013年4月

『鶴戸さん その信仰と伝承』

本部雅裕、1680円、鉾脈社、2012年12月

『伊勢神宮 式年遷宮と125』

社をめぐる旅』

神社庁編纂、1260円、平凡社、2013年1月

『明治神宮「伝統」を創った大プロジェクト』

今泉宜子、1575円、新潮社、2012年2月

『神道思想史研究』

高橋美由紀、7140円、ペリカン社、2013年2月

『神の島 沖の島』

藤原新也・安倍龍太郎、2940円、小学館、2013年5月

『震災復興と宗教』

稲場圭信・黒崎浩行、2625円、明石書店、2013年4月

『神仏習合の歴史と儀礼の空間』

嵯峨井建、9030円、思文閣出版、2013年1月

『お伊勢参り』

鎌田道隆、840円、中央公論新社、2013年3月

『招魂と慰霊の系譜』

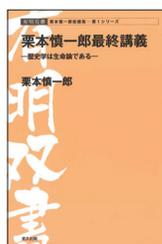
國學院大學研究開発推進センター編、3570円、錦正社、2013年3月

『渋谷の神々』

石井研士編著、3570円、雄山閣、2013年3月

『栗本慎一郎最終講義』

栗本慎一郎、1103円、武久出版、2013年4月



『栗本慎一郎の全世界史』

栗本慎一郎、1659円、技術評論社、2013年7月

学会・学術情報

●三笠宮家ゆかりの染織美―貞明皇后、慈しみの御心
場所…三の丸尚三蔵館
会期…後期(8月31日から9月29日まで)

開館時間 午前9時から午後4時45分(9月1日から4時15分)

入館は閉館の15分前)

入館料…無料

休刊日…毎週月・金曜日(9月16日・23日は開館・翌日休館)

問合せ…宮内庁(☎03-3213-1111代表まで)

●水戸学の硯学で30回講座 常盤神社
会場…同神社社務所別館

受講料…無料

時間…午前10時開始 約1時間半から2時間程度

◎9月22日「新論を中心に」安見隆雄(元茨城県立高等学校校長・水戸史学会会長)

◎10月20日「会沢先生の門人達」久野勝弥(水戸史学会副会長) 問合せ…同社社務所(☎029-1221-0748まで)

●祇園祭と八坂神社

会場…市立小倉城庭園企画展示室(北九州市小倉北区1-2)

会期…9月16日まで
観覧時間 午前9時〜午後6時(受付は5時半)

休館日…8月12日
観覧料…一般300円、中学・高校生150円、小学生100円

●第62回神宮式年遷宮展「御白石」の開催

場所…神宮徴古館

会期…平成25年7月9日(火)から9月8日(日)まで

問合せ…北九州市立小倉城公園(☎093-582-2747)

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
 - ◎ご入会のご案内:神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。
- | | |
|----------------|----------|
| 一般会員(年会費) | 3,000円 |
| 賛助会員(年会費) | 10,000円 |
| 特別賛助会員(個人・一時金) | 30,000円 |
| 特別賛助会員(団体・一時金) | 500,000円 |

NPO法人 神道国際学会
〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shinto.org

編集後記

2013年をもって神道国際学会が大きな節目を迎えた。新体制のもとで再出発したのである。英語名もかわりISSA International Shinto Studies Associationと改称された。『神道フォーラム』も体裁と内容において新しくなった。読者のみなさんに人気の連載『神道DNA』、『話題のこの人』欄などはもちろん続けるが、『神社巡り』、『理事の業績』という新しい企画も導入した。この『神道フォーラム』はどんなにいいものにしていきたいと思う。読者のみなさんから是非ご意見、ご感想を聞かせていただけたらと思う次第である。(J.B)